

第1話 「母から娘へと受け継がれるもの」 辻 仁成

母の思い出の品を兄弟で分けることになり、わたしは真っ先に母が大事にしていたこの一枚の皿を選んだ。初恋が失恋に終わった時にも、友達に裏切られた時にも、結婚に迷っていた時にも、夫とすれ違って泣きついた時にも、母はこの皿の上に出来立ての焼き菓子を静かにきれいに並べてみせた。それはカヌレだったり、フィナンシェだったり、マドレーヌだったり、サブレだったり、噛んだ次の瞬間に様々な触感と甘さでわたしのささくれだった心を癒す、まさに母の愛情の塊であった。母とわたしはこの皿を挟んで向かい合い、焼き菓子がなくなっても、淡い光りを纏う絵皿を見つめながら、落ち着きを取り戻すまでの時間を共有した。母は焼き菓子がなくなった皿を指さし、形見なのよ、と小さく告げた。繊細な図柄はまるで祖母の心模様を見ているようである。



Blue Fluted Half Lace (ブルーフルーテッドハーフレース)

母もわたしと同じように、この皿を挟んで自分の母親と対峙したに違いない。今、わたしは思春期になった娘のために母がしたのと同じように焼き菓子を静かにきれいに並べている。初恋が失恋に終わった娘がかつての自分と重なる。「ママ、何かおかしいの、わたしがこんなに苦しんでいるというのに」わたしは皿をちよつと娘の方へと押しやり、食べてごらん、と告げる。目を腫らした娘が焼き菓子を口にした途端、大粒の涙が頬をこぼれ落ちた。涙が出来立ての焼き菓子を濡らす。甘くてしょっぱいのが人生だ、とわたしは思った。

母から娘へと受け継がれてきたこの皿だけが知っている物語。人間は「パパ」と呼ぶよりも断然「ママ」のことを多く呼ぶ。パパのことは大好きだったが、ママは必要だった。だからわたしも娘のためにたくさん焼き菓子を焼いてあげたいと思う。母がわたしにそうしたように、焼き菓子をこの絵皿の上に静かにきれいに並べる。そうだ、静かにきれいに並べなければならない。 つづく。



Mitsunari Tsuji

1989年「ピアノマン」で第1回文学賞を受賞。1997年「海城の光」で芥川賞、1999年「白狐」のフランス語訳「Le Buddha blanc」で仏アカデミー賞・外国小説賞を日本人として初めて受賞。著書に「ツヨナライツカ」「志摩」「永遠者」など多数。近年は「白らぼもカ」(光文社)、ミュージシャン、映画監督、実作家など文学以外の分野でも幅広く活動。現在は拠点をパリに置き創作に取り組む。



ROYAL COPENHAGEN

PUFFY TO HER MAJESTY THE QUEEN OF DENMARK

<https://www.royalcopenhagen.jp>